CITY × UNIVERSITY

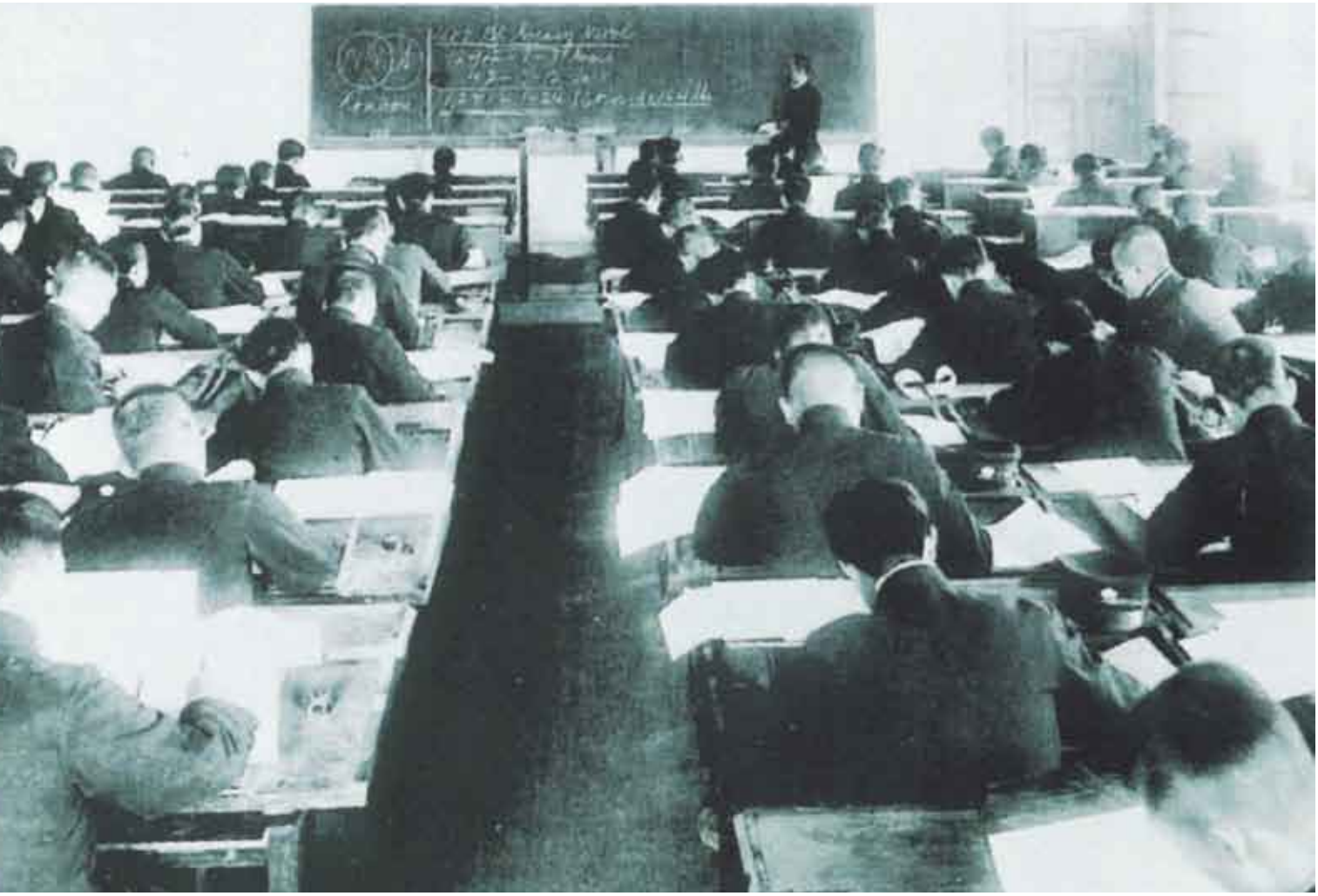
大阪市立大学広報
2010.4.1 Vol.6

Special —特集—

大阪市立大学の130年

Professionals 教員紹介 —— 理学研究科 教授 中村 太郎
Sagesse 教員に訊いてみよう！
Road to OCU 入試情報
Discovery 意外に知らない市大の姿
Clubs クラブ・サークル
Information お知らせ
The Office of Dean 学部長室から
Alumni 卒業生から

大阪市立大学が歩んできた130年の歴史を振り返る



2010年11月、大阪市立大学は創立130周年を迎えます。1880（明治13）年に設立された大阪商業講習所をはじめとするいくつかの源流が合流して一つの大きな河となり、今日の大阪市立大学があります。

この間、本学の歩んだ道は平坦なものではありませんでした。それぞれの時代において紆余曲折を経ながらも、先人たちの理想や熱意、そして多大なる努力によって学内外の困難を乗り越えてきました。本学の歴史は、市民とともに歩んできた歴史であり、大阪の市民精神が本学の学風と伝統を育んできたと言えるでしょう。

民間の熱意で設立された大阪商業講習所

大阪市立大学の源流である大阪商業講習所が設立されたのは、明治維新からわずか10年余りの一八八〇（明治13）年のこと。当時は西欧列国に肩を並べるべく、近代化をリードしていけるエリート人材を育成する近代高等教育制度が整備されていった時代であり、一八七五（明治8）年には東京に、一八七八（明治11）年には神戸に商法講習所が作られていた。

大阪商業講習所設立のきっかけとなる問題提起をしたのは、『大坂新報』の編集主幹として東京からやってきた加藤政之助だった。当時26歳の加藤は来阪してわずか4日後の一八七九（明治12）年8月14日と15日に、長文の社説「商法学校設ケザル可ラズ」を発表。全国の商業の中心として栄えている大阪に、なぜ商法学校がないのか、という問題提起をしている。その上で、当時の西欧列強国と対等な貿易を行い、激しい戦争の中で日本という国が生き残り、繁栄していくためには、1日も早く商法学校を作って専門的人材を育成する必要があるという主張がなされた。

この加藤の問題提起は、当時の大阪財界の指導者であった五代友厚にも支持された。かつて天下の台所として栄えた大阪は、明治維新によってその基盤が根底から揺らいでおり、深刻な状況にあった。そのため、大阪の財界をリードする人たちにとって、大阪を商業都市として再興することは大きな命題の一つとなっていたのだ。

日本の近代化推進、国力増強のための近代商業学校設立という五代らの構想への賛同者が集まり、大阪に近代商業学校である大阪商業講習所が設立されることとなった。

開所当初は地元の財界人たちの出資によって成り立つ私学だったが、開設3ヵ月後の一八八一（明治14）年2月には、早くも講習所の大阪府移管の動きが起こっており、意見書『公立大阪商業講習所設立趣意書』が大阪府知事宛に提出されている。そこでは、発足直後でまだ設備・内容の整備が不十分であるにも関わらず、すでに生徒数が100名を超えていることを挙げ、大阪における商業教育の潜在的なニーズが高いことを指摘。なお一層の加護を加えて充実を図れば、大阪府の商業の発展のみならず、全国の商業に携わる者の教育に役立ち、日本の商業・経済面における権利の回復・国際的自立にも寄与するだろう、としている。その後すぐ、一八八一（明治14）年7月27日にこの請願が府知事に受理され、府立大阪商業講習所が発足した。

大阪市立大学　略年表

1880 大阪商業講習所（私立）設立
1881 府立大阪商業講習所となる
1885 大阪商業講習所を改組し、府立大阪商業学校設立
1889 第1回水上運動会（ボート祭の起源）開催
府立大阪商業学校を大阪市へ移管
市立大阪商業学校と改称
1901 市立大阪高等商業学校に昇格
1907 市立大阪工業学校（理・工学部の源流）創立
1919 大阪市立高等商業学校と改称
1921 大阪市立西区高等実修女学校（生活科学部の源流）創立
1928 大阪商科大学創立
1944 大阪市立医学専門学校（医学部の源流）創立
1945 大阪商科大学杉本学舎、占領軍によって接収
1949 大阪市立大学創立（商、経済、法文、理工、家政の5学部）
1953 法文学部を分離、法学部と文学部を設置
大阪市立大学大学院創設
1955 大阪市立医科大学を大阪市立大学に編入し、
医学部設置
杉本学舎の全面返還
1959 理工学部分離、理学部と工学部を設置
1975 家政学部を生活科学部と改称
1982 文化交流センター設置
1996 学術情報総合センター開設
1998 看護短期大学部設置
2003 創造都市研究科設置
大学教育研究センター設置
新産業創生研究センター設置
2004 大学院法学研究科法曹養成専攻（ロースクール）設置
医学部看護学科設置
2006 公立大学法人大阪市立大学となる
都市研究プラザ設置
保健体育科研究室を改組し、都市健康・
スポーツ研究センター設置

国立大学のコッピーではない市立の大学へ

大阪商業講習所は、改組や市への移管を経て大阪市立の高等商業学校となり、その後は大学昇格に向かって進んでいくこととなる。その布石となる出来事として、一九一四（大正3）年7月の関一の来阪が挙げられる。関は来阪当初から大阪高等商業学校の大学昇格に強い関心を示しており、その基盤づくりを始めた。

ちょうどその頃、第一次大戦によって工業化と都市化がより一層押し進められ、高等教育へのニーズも急激に高まっていた。そうした要請に応えるべく、一九一八（大正7）年12月には官立以外の公立・私立や、単科大学も大学として認める「大学令」が出された。大学令の制定と、それに続く各校の大学設置・昇格にも触発され、大阪商科大学昇格に向けての働きかけが各方面で積極的に行われるようになる。高等商業学校の校長や学生自身が昇格への意欲を見せるのは当然ながら、同窓会もそれをバックアップし、関助役など大阪市行政も大阪市会も商科大学設置に積極姿勢を見せ、大阪商業会議所もそれを後押しするという、大阪市の当局・財界・高等商業学校の校長・在学生および卒業生たちが一丸となった大学昇格への運動が展開された。

しかし当時の大学令は、公立としては道府県にのみ大学設置を認めており、「市」による設置は法令上認められていなかった。大阪市立の商科大学を設置するためには、まず大学令の規程を変更する必要があったが、文部省は市の大学設置に対しては難色を示し続けていた。大阪市長となった関も働きかけ、最終的に大学令が改正公布されたのは一九二八（昭和3）年1月のことであった。3月には市立の大阪商科大学が創立される。

関は大学開設にあたって『市立商科大学の前途に望む』と題する一文を草し、商大設立の意義と理念を展開した。第一に、大学を大都市に必要な精神文化の中心的機関と位置づけ、第二に、そのためには「市民」の力を基礎として市民生活に密着した大学、国立大学の「コッピー」ではない大学が必要であり、第三には、大阪市・大阪を背景とした学問の創造が無ければならない、とした。関によって示された商大設立の理念は、その後の商大の研究・教育のあり方に大きな影響を及ぼした。

大阪市と大学が一体となり、大阪市立大学として出発

第二次世界大戦後の一九四七（昭和22）年には教育基本法・学校教育法・大学基準が制定され、翌年には12の公私立大学が新制4年制大学として発足。大阪商科大学でも新制大学の創設をめぐる議論が行われた。一九四七（昭和22）年6月頃には大阪帝国大学総長より、大阪帝国大学と大阪商科大学で新制総合大学として再出発しないかとの誘いがあった。しかし商科大学側は、「公立大学として培ってきた伝統の上に立って独自の道を歩んでいくべきではないか」、また「大阪市という大産業都市には総合大学は2つ併存し、それぞれ独自のカラーを打ち出していくべきではないか」と考え、独自に新制大学への移行構想を練っていた。

同じ頃、大阪市立医科大学・都島工業専門学校・女子専門学校も、それぞれ新しい方向を模索しており、そうした動きをみた近藤博夫市長は、4つの大学・学校を一つの新制総合大学へとまとめることを決意。一九四八（昭和23）年7月には、大阪に関係する人々を集めて「大阪市立新制大学設置準備委員会」を設置し、商・経・法文・医・理工・附設女子大学からなる総合大学の設置を決定した。これは、当時の大阪市としては大変なビッグプロジェクトだった。

大阪市立大学を設置するにあたって中心的な役割を果たした近藤市長は、開学式でこのように述べている。「大阪市立大学は大阪カラーの豊かな大学にしたい。同時に大阪市は大学カラーの豊かな、知的な文化都市にしたいというのが本大学設立にこめられた願いであります」。

そうした近藤市長の想いに応えようと、恒藤恭学長は次のような高い理想を掲げた。「大阪市立大学はあらたに発足するに当り、理論と実際との有機的な連結を重視する学風をかたちづくって行くことを念願して居り、各種の分野において社会の実用に役立つ研究成果を挙げると共に、社会のさまざまの方面の職域において真に有能なはたらきをなし得るような人間を養成することを期している……」

その後、二〇〇六（平成18）年に公立大学法人へと移行してからも先人の想いは受け継がれ、「創造性豊かな都市型総合大学」として、時代と社会の要請に応えた教育・研究を行い、その成果を市民と社会に還元

しようと努めている。

世界で活躍している大阪市大の卒業生・教員

大阪市立大学の卒業生や教員は、本学で学んだことや研究を活かし、各方面で活躍している。最近では、二〇〇八年8月に開催された北京オリンピックのシンクロナイズドスイミング・チームフリールーティンに、小林寛美さんが出場。小林さんは経済学部の卒業生であり、在学中に日本代表チームの一員となった。二〇〇八年5月からは都市健康・スポーツ研究センターの客員研究員を務めている。

同じく二〇〇八年には、本学の名誉教授である南部陽一郎博士がノーベル物理学賞を受賞。南部博士は一九四九年から6年間、本学理工学部に在籍し、創設期の理工学部物理学科の礎を築かれ、一九七八年には名誉教授となった。南部博士のノーベル賞受賞を受け、金児曉嗣学長（当時）は以下の喜びのコメントを寄せている。「南部先生の今回のご受賞に恥じぬよう、今後とも、本学の教育及び研究水準を向上させ、世界をリードする創造的人材を育成することにより、世界最高水準の大学づくりを推進していきたいと存じます」

いま、そしてこれからの大阪市大の教育・研究活動

創立以来、時代を先取りする大学の将来像を構想し、自己変革を試みて、社会の要請に応えようとしてきた大阪市立大学。その姿勢は今も貫かれており、二〇〇七年度には、より効果的かつ実効性のある英語教育を提供することを目的とした「英語教育開発センター」を設立。従来の外国語科目「英語」を「CE（Colleege English）」に改編し、ネイティブ・スピーカーの教員による少人数制の授業により、バランスのとれた英語力の養成をめざしている。

本学の取組は文部科学省にも評価されており、GP等に8つのプログラムが採択されているほか、国際競争力のある世界最高水準の大学づくりを推進することを目的とした「COEプログラム」に4拠点が採択されている。これらの拠点では、疲労のメカニズムの解明や治療法の開発、疲労緩和・過労予防などに関する研究や、都市をテーマとした研究・まちづくりの活動などを行っており、市民の声を聞き、市民知に学びながら研究を進めている。

また、大阪で育まれた伝統芸能である文楽を学問的に学ぶ「上方文化講座」や、落語を通して大阪の文化・芸能について学ぶ「大阪落語への招待」といった公開授業を開講。これらの授業は大学の正規授業科目でありながら一般市民にも公開されており、学生と市民、研究者がともに大阪の文化について考える場となっている。他にも「市民医学講座」や「文化交流センター講座」などの公開講座を多数実施。大阪商業講習所の創立以来、さまざまな変遷を経て育まれてきた「大阪市立大学らしさ＝市民の大学としての積極的伝統」は、一三〇年という時が経った今なお受け継がれている。

◇◇◇GP・COEプログラムとは？◇◇◇

文部科学省は、「国公私立大学を通じた大学教育改革の支援」として、各大学などにおける大学改革の取組が一層推進されるよう、特色・個性ある優れた取組を選定・支援しています。

さまざまな視点から大学の取り組みを評価しており、社会的要請の強い政策課題に対応した優れた取組を支援する「現代GPプログラム」や、国際的に卓越した教育研究拠点の形成を支援する「グローバルCOEプログラム」などがあります。

大阪市立大学はばたけ夢基金のご案内

本学の原点「大阪商業講習所」の開所から130周年を迎えるのを機に、新たに大阪市立大学はばたけ夢基金を設立いたしました。その運用益を原資として、末永く、未来にはばたく人材の育成やより高度な研究の推進とその成果の社会への還元に活用してまいります。

大阪市立大学が遥か未来にわたって学生・卒業生・市民の皆様に愛され、夢のある魅力ある大学であり続けるために、何卒本基金の趣旨に御理解と御賛同を賜りますようお願い申し上げます。

＜お問い合わせ先＞

はばたけ夢基金事務局

電話：06-6605-3415（平日9～17時）FAX：06-6605-3416

◇◆◇大学ホームページでもご案内しております◇◆◇

文／宮森 祐巳子（言の葉）
写真／大学史資料室、総務課提供

医療の発展や食料・環境問題の解決に寄与するライフサイエンスの研究

理学研究科　教授　中村　太郎

ヒトの細胞と似ている酵母の胞子形成過程を研究

酵母という言葉からイメージされるのは、ビールや日本酒などのお酒やパンだろう。しかし、研究の分野でも、酵母は使われている。酵母の外見はバクテリアに似ているが、その構造は核やミトコンドリア、ゴルジ体があり、ヒトの細胞とよく似ているのだ。また、酵母とヒトの細胞は、同じ遺伝子を持っているという特徴がある。

酵母は多くの種類があるが、研究には出芽酵母と分裂酵母の2つがよく用いられている。「出芽酵母」は出芽によって増え、パンやビールなどを作る際に用いられる。一方の分裂酵母は、分裂によって増殖し、タンパク質のアミノ酸配列のヒトとの類似度も出芽酵母より高いことなどから、主に研究に用いられる。中村先生が扱っているのは、分裂酵母だ。

「酵母は培養が簡単であり、増殖が速いという特徴があります。また、突然変異株を取得しやすく、任意の遺伝子の破壊が容易、遺伝子の出し入れが自由など、研究に適した特徴が多いのです。この分裂酵母を用いて、胞子形成過程について研究を進めています。この過程は、高等生物の生殖母細胞が減数分裂によって卵と精子になる配偶子形成に対応する現象です。細胞の中に細胞を新生するユニークな細胞分裂であり、分裂酵母のライフサイクルの中で最もダイナミックな現象であると言えます」。

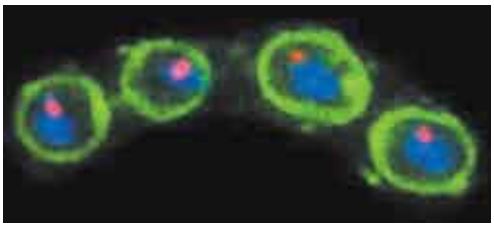
これらの研究で得られた成果は、他の生物の研究で得られた成果と組み合わされ、ヒトのタンパク質の機能を調べる研究や、薬品の開発などに応用されていく。

Depertment of Biology, Graduate School of Science

■中村先生プロフィール

理学研究科 教授 中村（なかむら） 太郎（たろう）

広島大学工学部醗酵工学科卒業、広島大学大学院工学研究科工業化学後期博士課程修了、工学博士。理化学研究所基礎科学特別研究員、本学理学部・助手、講師、助教授・准教授を経て、2010年より現職。
専門分野：分子細胞生物学



分裂酵母胞子の蛍光顕微鏡写真
（緑:胞子細胞膜タンパク質を緑色蛍光タンパク質でラベルしたもの
青:核　赤:中心体）

ナショナルバイオリソースプロジェクトの拠点に

生命現象の複雑かつ精緻なメカニズムを解明するライフサイエンスは、医療の飛躍的な発展や食料・環境問題の解決につながるなど、国民生活の向上・経済の発展に大きく貢献するものとして期待されている。

そうした研究に用いられるバイオリソース（生物材料）は長年の研究から産み出されるものであり、それをもとにして、また新たな研究が生まれることとなる。そのため、バイオリソースを研究者間で共有することは、この分野の発展に欠かせない。優れたバイオリソースの存在は、研究活動の発展を加速し、日本のライフサイエンス研究の国際的優位性の確保に貢献することにつながっていくのだ。

そのため、文部科学省では、バイオリソースを体系的に収集、保存、提供を行うための「ナショナルバイオリソースプロジェクト（NBRP）」を実施。中村先生の研究室はNBRPの酵母分野における中核機関に選定され、分裂酵母の菌株、DNAクローン、DNAライブラリーの保存と分譲事業を行っており、検索機能付きのデータベースを公開している。

「この研究室には、日本全国の研究者から分裂酵母の菌株などのバイオリソースが集まってきます。それらを保存しており、研究者からオーダーがあれば、必要なリソースを提供する。そして、研究者からのさらなるフィールドバックを求め、グレードアップされたリソースを環流させる循環システムを構築しています」

この拠点には日本国内のみならず、海外の研究者からのオーダーも数多く寄せられる。中村研究室は、日本が世界に誇る分裂酵母保存の拠点として、今後ますますの発展と充実を期待されている。

生物地球系専攻前期博士課程
2010年修了　寺口絵理香さん

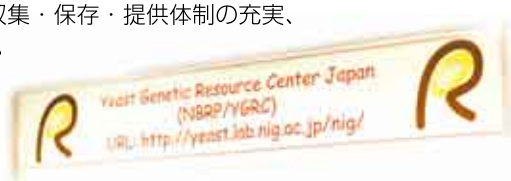
高校の生物の授業を面白いと思ったことがきっかけで、大学でも生物学を勉強したいと思って理学部の生物学科に入りました。1回生の頃から大学院への進学は決めていて、中村先生の研究室に入りたいとも思っていました。研究室では、分裂酵母を使って新しい細胞膜がつくられていくメカニズムについて研究しました。中村先生は物事をとても分かりやすく説明してくださる方です。専門的な実験も原理から丁寧に教えてくださり、学生に対して「理解させたい」という気持ちがとても強い先生だと思います。先生のご指導のおかげで、私自身も原理を理解しながら実験に取り組むことを心懸けるようになりました。

ナショナルバイオリソースプロジェクトについて

ナショナルバイオリソースプロジェクトとは・・・文部科学省では、2002年度から2006年度まで「ナショナルバイオリソースプロジェクト」を実施し、国が戦略的に整備することが重要な生物材料（生物遺伝資源あるいはバイオリソース）について、体系的に収集、保存、提供等を行うための体制を整備してきました。この結果、動植物・微生物等25のバイオリソースおよびそれらに関する情報拠点が整備されました。

2007年度から開始した第2期では、これまでの体制を最大限に活かしつつ、新たなバイオリソースを加え、2010年に世界最高水準のバイオリソースの整備をめざして、バイオリソースの収集・保存・提供体制の充実、ゲノム解析等による付加価値向上や保存技術等の開発を実施しています。

ナショナルバイオリソースプロジェクト(NBRP)情報公開サイト
http://www.nbrp.jp/



文／宮森 祐巳子（言の葉）
写真／岡崎 誠

Sagesse

初代学長 恒藤恭ってどんな人？

大阪市立大学名誉教授／特任教授
広川 禎秀

── 教員に訊いてみよう！──

Q.恒藤恭はどんな人だったのでしょうか

恒藤恭（一八八八―一九六七）は、大阪市立大学の初代学長として、また卓越した法学者として著名ですが、近年、芥川龍之介との交流、戦時下の平和主義思想も注目されています。

学者としての恒藤は、日本の法哲学の確立者の一人として有名です。法哲学とは法の原理に関する学問ですが、恒藤の研究は広く国際法や社会思想にも及んでいます。

恒藤の最大の功績は、戦前の天皇制のもとで、日本国憲法に具現した戦後日本の民主主義、平和主義につながる原理や思想を深く考察したことです。戦後、日本の代表的法学者の一人と目されましたが、恒藤は時代を先取りした法学者であり、戦中・戦後の傑出した知識人の一人でした。

恒藤　恭

Q.恒藤はどうして大阪市大の学長になったのですか

そのいきさつをたどると、一九三三（昭和八）年の瀧川事件までさかのぼります。

この年、鳩山一郎文相は京大法学部の瀧川幸辰教授をその自由主義思想を理由に処分したため、学問の自由と大学の自治を擁護する法学部教授団と学生の大きな運動が起こりました。恒藤は、佐々木惣一（一八七八―一九六五）とともに教授団の中心でした。しかし法学部側が敗れ、多くの教官が京大を去りました。

ちなみに瀧川事件は、日本国憲法第二十三条「学問の自由は、これを保障する」という規定を生み出すきっかけとなった歴史的事件の一つです。

本学の前身・大阪商科大学の河田嗣郎（一八八三―一九四二）学長は、京大を辞めた恒藤と末川博（一八九二―一九七七）を商科大学に招きました。軍国主義が台頭していた当時としては勇気のいる決断でした。この結果、恒藤は戦後、大阪商科大学の学長となり、一九四九（昭和二十四）年に創立された総合大学・大阪市立大学の学長となるのです。

Q.恒藤と芥川の交流とはどのようなものだったのですか

恒藤は、一八八八（明治二十一）年、松江市に生まれ（旧姓井川）、中学時代から文学の才能をあらわし、約三年の療養生活を経て、一九一〇（明治四十三）年に文学を志して上京します。恒藤の詩歌やスケッチが多数残っています。

恒藤は、その年第一高等学校に入学し、まもなく寮で同室となった芥川龍之介（一八九二―一九二七）と無二の親友となります。恒藤は、やがて文学志望から法科志望に転じ、京都大学に入学して優れた法学者となりますが、芥川との親交は芥川の自殺まで続きます。

本学には芥川の恒藤宛の書簡が百通余り保存されています。芥川書簡中、恒藤宛の書簡はその内容においてずば抜けて貴重な書簡群です。それは、恒藤と芥川という大正・昭和時代の法学界と文学界における二人の知的巨人の人生、文学、学問などにわたる広く、深い知的交流を物語る資料です。芥川が失恋の苦悩を伝えた手紙もあります。恒藤は、芥川の思想形成にも深くかかわった人物でした。

「京都四条大橋」恒藤恭筆（大正初期）

Q.恒藤は大阪市大の学長としてどんな役割を果たしたのですか

大阪市立大学の歴史のなかで、現在につながる大学の理念をつくった人物が二人います。一人は、一九二八（昭和三）年の大阪商科大学創設の中心となった大阪市長・関一（一八七三―一九三五）で、もう一人が恒藤です。関は、大阪商科大学は国立大学の「コッピー」であってはならないという言葉を残し、それは今も本学の独立不羈の精神をあらわす言葉となっています。

恒藤は、草創期の本学に不可欠の存在でした。恒藤は、関の理念も受けつぎ、真理の探究と、平和と民主主義を重んじる人間の育成という大学の使命を実現するべく、市立大学の具体的構想をまとめあげ、一九四九年四月、本学の誕生をみるに至りました。恒藤は一九五七年まで学長を務めましたが、本学の組織の骨格と自由な市民的学風はその時代につくられたといえます。今も本学のなかにさまざまな形で恒藤の理想主義は生きています。

大阪市立大学名誉教授/特任教授（学術情報総合センター）
広川禎秀

入試イベント情報

■オープンキャンパス（8月5日（木）・6日（金））※参加費無料、予約不要

入試概要説明、学部・学科紹介、コース別相談会、先輩からの一言など多彩な内容を用意しています。
杉本キャンパス（医学部以外の学部）・阿倍野キャンパス（医学部：医学科・看護学科別々に、両日の内で日を変えて開催）で開催します。この機会に是非ご参加ください。

■進学ガイダンス

高校生・保護者等を対象とした進学ガイダンス（会場形式）が４月から９月頃まで、大阪市内の会場を中心として行われます。本学も他大学とともに多数の進学ガイダンスに参加を予定しています。その際、本学教員及び入試担当職員が、会場内のブースで個別に面談します。

募集要項の配付について

学部の一般入試要項及びその他入試要項（推薦入学・編入学等）、大学院入試前期博士（修士課程）の学生募集要項などを順次配付する予定です。
学生支援課入試担当の窓口で配付するほか、郵送でもご請求いただけます。
詳しくは本学ホームページ（http://www.osaka-cu.ac.jp/）でご確認ください。

入試の過去問題について

学部のその他入試及び大学院入試の過去問題につきましては、各学部・研究科事務室で閲覧・コピーすることができます。なお、学部・研究科によっては、取扱い方法が異なることがありますので、事前に各学部・研究科事務室までお問い合わせください。
なお、学部の一般入試の過去問題につきましては、閲覧対応いたしておりません。市販されている問題集をご利用ください。

資料請求方法について

すべての募集要項、大学案内の請求ができます。

1. 請求する封筒の表に「平成○○年度○○学部学生募集要項請求」と「赤色」で請求する資料名を記入し、裏には差出人の郵便番号・住所・氏名・電話番号を記入してください。
   （例１）一般入試の募集要項を希望される方は、「平成 23 年度募集要項請求」と「赤色」で記入。
   （例２）平成 23 年度生活科学部　推薦入学　学生募集要項を希望される方は、「平成 23 年度生活科学部　推薦入学　学生募集要項請求」と「赤色」で記入。
2. 返信用封筒（390 円分の返信用切手を貼り、受取人の郵便番号・住所・氏名を明記した角形２号：24.0cm × 33.2 cm）を同封してください。
3. 請求先（あて先）
   〒 558-8585　大阪市住吉区杉本３丁目３番 138 号
   大阪市立大学　学生支援課入試担当
   電話：06-6605-2141　FAX：06-6605-2133

先輩からのメッセージ

医学部看護学科４回生　坡山（はやま） 千紘（ちひろ）

私は高校時代、毎日部活での練習に励み、実際に本格的に受験勉強を始めたのは３年生の夏休みからでした。本番のセンター試験で大きなミスをしてしまい、合格判定では最低ランクが出てしまったのですが、諦めずに自分の出来る限りの勉強を続けて二次試験に臨むことで合格することが出来ました。
大学では、病院実習で様々な科を回りながら沢山の患者さんと関わらせて頂き、毎日実に多くのことを学んでいます。それ以外にも、部活やアルバイトなど、充実した大学生活を送っています。
受験生の皆さん、最後の１秒まで努力を続け頑張り抜いたら、きっと結果は付いてくると思います。辛くなってしまう時もあると思いますが、そんな時は今まで頑張って来た自分を信じ、最後まで諦めないで下さい。応援しています！

秘密の花園――旧図書館――

旧書庫一階。左手の壁面にあるのは書籍用エレベータ。右手の扉のなかは更衣室となっていたが、エレベータが撤去された跡という。

一九一一年、バーネット(Frances Eliza Hodgson Burnett, 1849-1924)が発表した児童文学 *The Secret Garden* は、両親をコレラにうばわれ伯父の家にひきとられたメアリーが、そこで閉ざされた庭園を発見し、ひそかにその廃園をよみがえらせてゆくなかで成長し、また伯父の心をひらくというモノガタリである。この作品が、さきごろテレビドラマにもなっていたおなじ作者の『小公女』ほどではないにせよ、ひとにしられる理由のひとつは、たしかに和訳題名のおかげに相違ない。

この作品を「秘密の花園」と訳したのは、明治から戦後まで四十八年の長きにわたり刊行された実業之日本社の名雑誌『少女の友』の編集者で、のちに第二、第四代の主筆をつとめることになる岩下小葉だが――初版刊行は一九一七(大正六)年――、けだし名訳といえよう。なにしろ、その後も、唐十郎の芝居、松田聖子の歌謡曲、矢口史靖の映画、三浦しをんの小説などのタイトルとして「引用」され、いまなおその魅力をうしなっていないのである。もちろんこの原題を忠実に訳せば「隠された庭」となり、そこには「秘密」という語の神秘感も「花園」という語の祝祭感もないのだが、そもそも、閉ざされた庭」という概念そのものが、秘密かつ可能性を秘めた、いわば「祝福されたトポス」であることを含意していたのだ。そしてそれは、「学園」という語のしめすように、ひとつの学校なのであり、成長の場の譬喩(ひゆ)でもあった。

ワシントン椰子が自生する中庭

旧図書館研究室

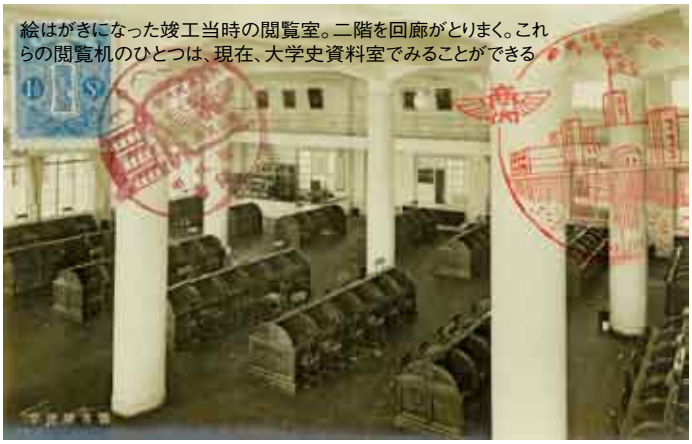
本館地区北東部に建つ二階だて建築と、その南に隣接する五階だての建物は、この連載第一回目にとりあげた一号館や、旧教養地区に現存する二号館、第一体育館などとおなじ旧制大阪商科大学の建物であり、一号館と同時期の第三期工事として一九三二(昭和七)年一二月に着工、一九三四(昭和九)年七月に竣工した。二階だてのほうは、研究室および吹き抜けの開架書庫と閲覧室をそなえた図書館研究室棟であり、五階だてのほうは閉架書庫である。書庫の方は、その後の蔵書数増に対応して、南側に増築棟が建設された。この施設は、連載第二回目にとりあげた学術情報総合センターが開館す

― 意外に知らない市大の姿 ―

旧書庫。奥にみえるのは、のちに増築された二棟の書庫

絵はがきになった竣工当時の旧図書館研究室棟と書庫

現在は封鎖されている二階にある研究室のひとつ。天井が高い


絵はがきになった竣工当時の閲覧室。二階を回廊がとりまく。これらの閲覧机のひとつは、現在、大学史資料室でみることができる

いまも配架図がのこる旧書庫

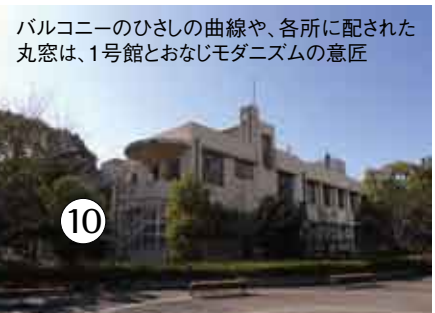
サークルボックスは暗証式キーをそなえる

杉本学舎の完成を記念して作成された絵はがき

ふきぬけであった旧閲覧室の二階部分は床を増設され音楽練習室となるはずだったが、現在はつかわれていない

旧書庫と増築された書庫とのあいだの空間

バルコニーのひさしの曲線や、各所に配された丸窓は、1号館とおなじモダニズムの意匠



る一九九六(平成八)年まで、大阪市立大学附属図書館および書庫として利用されている。このほか、北側に閲覧棟が増設されていたが、図書館の移転とともに取り壊され、現存しない――このとき、閲覧棟の存在した本館地区北東角の敷地が歩道に転換されている――。

現在

学情センター開館後、しばらく閉ざされていた旧図書館は、二〇〇三(平成一五)年の全学共通教育棟建設にともない、三号館(旧制商科大学の高等商業部本館として、一九三三(昭和八)年建設)およびサークルボックス棟(かつての進駐軍による建築物。通称「ウナギの寝床」)が取り壊されたことから、サークルボックスおよび音楽練習室の代替建物としてもちいられることになった。現在、一階の旧研究室と旧書庫の一部はサークルボックスに、旧閲覧室・開架書庫は音楽練習室として、日々学生たちの出入りする場所となっている。

未来

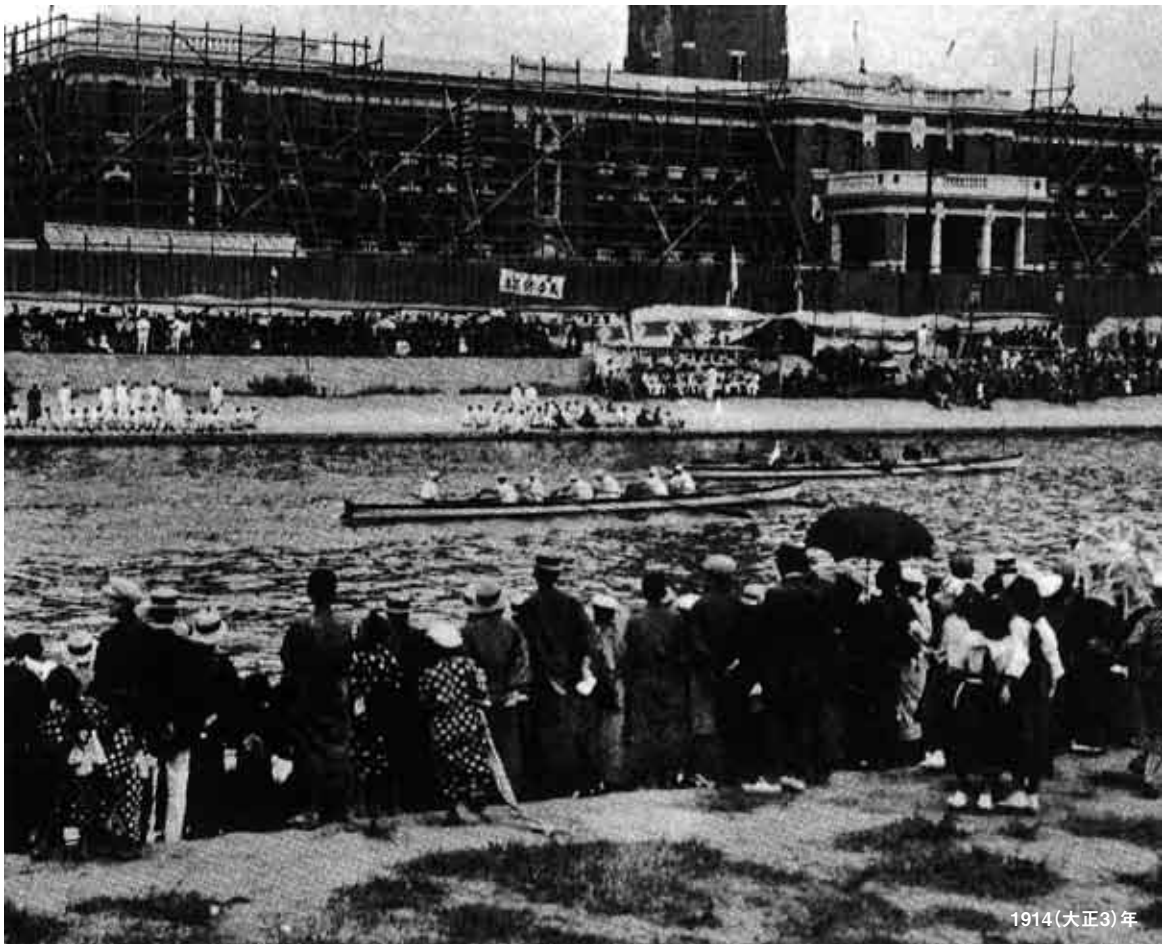
大阪市立大学の歴代キャンパスプランのなかで、学情センター候補地のほか、さまざまの建物の候補地とされてきた旧図書館であるが、来年二〇一一(平成二三)年度後期から、「学生サポートセンター」として、ふたたびの改装をうけることが決定されている。これは、現在、全学共通教育棟の学生支援課と各研究科・学部事務室に分散されている機能を集約し、このセンターのみでおおかたの手続きを可能とする、いわゆるワンストップ・サービスの提供を目的とした業務改編にともなうものだ。かくして、図書館という「記憶=過去」の集積地として出発したこの建物は、サークル活動という「青春=現在」の場をへて、就職支援をはじめとする学生たちの「未来」をになう窓口へと転身するわけである。

現在、サークルボックスに囲まれた旧図書館研究室棟の中庭は、小ジャングルのおもむきを呈している。だが、この「閉ざされた庭」だけではなく、この建物全体が、学生たちの成長をたすけ、見まもる場としての「秘密の花園」なのだ。

(文・写真/文学研究科教授　福島祥行)

Clubs

ボート祭の今と昔



1914（大正3）年

ボート祭は明治の大阪府立商業学校の時代から現在に至るまで連綿と受け継がれ、2010年に第119回を迎える大阪市立大学の伝統行事。現在でも大学内外から毎年約100クルーが参加し、広く市民の方々に親しまれています。

今回の「Clubs」では、130周年特別編として、ボート祭の「今と昔」を紹介し、その魅力をお伝えします。

水都大阪の「絵巻物」

ボート祭の歴史は、1889（明治22）年6月22日に堂島川で開催された大阪府立商業学校の「第1回水上運動会」から始まります。水都大阪の名物行事として多くの観客を集め、明治から大正中期にかけては「當日は學校内の各級應援ばかりでなく、市中一流の大商店が選手を出すとともにそれぞれ應援を繰り出したのであるから、その旗指物吹流しなどの物々しさ、譬えようもない盛況」だったと伝えられています。

1890年代には校内に5つものボートクラブがあり、このことからもボート競技が校内でいかに盛況であったかが想像できます。

大阪市内への復帰

ボート祭は戦争による中断を経て、1946年に堂島川で復活。水質汚濁や護岸工事の影響で堺市の浜寺公園で開催された時期もありましたが、「大阪市立大学の伝統行事は、やはり大阪市内で開催したい」というボート祭関係者の思いが実を結び、1979年、第88回大会からは再び大阪市内（大川）に返ることになりました。

1958（昭和33）年

困難と思われていた大阪市内復帰を果たした関係者の喜びは大きく、特に卒業生の盛り上がりは新聞にも取り上げられたほどでした。安田博大阪瓦斯社長をはじめ、実業界で活躍していた卒業生のはからいで、大阪瓦斯や松下電器産業（当時）の社員が応援団として繰り出し、会場を盛り上げました。

ボートでつながる市大生

戦争による中断や会場の移転という数々の困難を乗り越え、受け継がれてきたボート祭。ボート祭参加経験のある卒業生にボート祭について聞くと、「ボートを漕ぐだけではなく、仮装もしてみんなで盛り上がりました！他大学に通っていたらボートを漕ぐ機会もなかったと思います。実は卒業してからも2回参加しました」という答えが返ってきました。ボート祭は、在学生はじめ参加者の結束を強める役割を果たしているのです。

ここからは、第118回（2009年）、119回（2010年）ボート祭実行委員へのインタビューをお届けします。

―まず第118回実行委員の方にお伺いします。運営で大変だったことは？

泉　ボート祭当日に雨が降ったことです。舞台と会場放送用の機材を雨から守るために会場を走り回っていて、機材は濡れなかったものの自分はびしょ濡れになってました。

濱口　雨は大変やったなぁ。あと去年は新型インフルエンザによる休校の影響で、事前リハーサルができなくて。ぶっつけ本番だったのでトラブルが発生しましたが、なんとか乗り切りました。

志賀　広報班では、クラブや授業のためになかなかメンバーが集まれず、看板作りを少人数でやっていて忙しかったです。デザインも、みんなで決めようと思ってたのに、結局私が描いたものが、話し合いを経ずに採用されてしまいました。

ボート祭実行委員のみなさん。左から志賀佳織さん（生活科学部4回生。第118回ボート祭広報長として各広報物作成を担当。応援団所属）、折茂恭嗣さん（商学部3回生。第118回実行委員、第119回では本部長を務める。ラクロス部所属）、濱口朋也さん（経済学部4回生。第118回本部長としてボート祭を統括。合気道部所属）、泉侑樹さん（商学部4回生。第118回企画長としてスケジュール作成と舞台管理、SHK部員として会場放送を担当。SHK放送研究会所属）

濱口　みんな、クラブや勉強で忙しい中、実行委員をやってるからなぁ。本部長として難しかったのは後輩の実行委員にどうやって仕事してもらうかということ。実行委員は主に体育会の各クラブから選出されていて、最初はほとんど知らない者同士。仕方なく実行委員になった人もいます。だから、何より委員が楽しく仕事できる雰囲気づくりを心がけました。

折茂　確かに、僕も昨年の最初のうちは準備に行くのが嫌でした。でも、みんなと仲良くなれて最後には楽しい思い出が残ったから、今年もボート祭に関わりたいと思ったんです。

―実行委員を経験して、得たこと・良かったことは？

志賀　リーダーシップが身についたこと。広報長としてチームを引っ張った経験はこれから役立つと思います。

泉　もともとは引っ込み思案だったのですが、人前に立つことに慣れたのと、サークルや学部を超えて人脈が広がったこと。ボート祭後はキャンパス内に友達がかなり増えました。

折茂　さきほども言いましたが、実行委員同士がすごく仲良くなれたことです。

濱口　達成感、これに尽きます。やってるときは必死で、ものすごくしんどいけど、終わる頃には不思議とまたやりたくなってるんです。

―折茂さんは第119回の本部長。プレッシャーは感じますか？

折茂　はい。先日濱口さんから引き継ぎの資料を受け取ったんですが、それがカバンいっぱいに入ってて。その時点でかなりの重圧を感じました…

―最後に、みなさんに向けてアピールをどうぞ。

折茂　ボート祭では市大ボート部が出場者をサポートしてくれるので、初心者でも大丈夫。市民のみなさんも、新入生も、新入生以外の市大生も、ぜひ参加してください！

ボート祭に熱い思いを注ぐ実行委員たち。彼らが作り上げる今年の市大の伝統行事に、ぜひお越しください！

第119回大阪市立大学ボート祭

第119回ボート祭は平成22年5月下旬ごろ、大川（毛馬桜之宮公園）にて実施します。当日は競技のほか、各クラブ・サークルによるステージも予定しています。
詳細が決定次第、大学ホームページ（http://www.osaka-cu.ac.jp）にてお知らせします。

2009（平成21）年

Information

お知らせ

■公開講座・イベント情報■

申込方法など、詳しくは担当までお問い合わせください。

◆第142回市民医学講座「高齢者の腰痛」

【講演者】医学研究科教授　中村 博亮
【開催日】平成22年5月19日（水）
【時間】18時10分～20時
【対象】18歳以上の方
【受講料】無料　※資料代実費（希望者のみ）
【申込締切】平成22年4月26日（月）
【会場】医学部医学情報センター
【問合先】医学部医学情報センター
（電話）06-6645-2742

◆「文学部を知りたい人のための市大授業」（文学部）

◆「数学や理科の好きな高校生のための市大授業」（理学部）

【開催日】4月29日（水・祝）
【時間】13時～
【対象】高校生、予備校生等
【申込締切】平成22年4月26日（月）17時
【会場】大阪市立大学全学共通教育棟
【お問い合わせ先】
（文学部）06-6605-2350
（理学部）06-6605-2501

■市大ニュース■

◆理事長兼学長、副学長、研究科長、附属病院長等が決定

理事長兼学長、副学長、一部研究科長・学部長、附属病院長等を新たに選出しました。

理事長兼学長　西澤 良記
副学長（教育担当）　桐山 孝信
副学長（研究担当）　宮野 道雄
経営学研究科長・商学部長　青山 和司
経済学研究科長・経済学部長　脇村 孝平
法学研究科長・法学部長　安竹 貴彦
文学研究科長・文学部長　村田 正博※
理学研究科長・理学部長　櫻木 弘之
工学研究科長・工学部長　大嶋 寛※
医学研究科長・医学部長　石河 修
看護学研究科長・看護学科長　今中 基晴
生活科学研究科長・生活科学部長　多治見 左近
創造都市研究科長　中本 悟
教務担当部長　玉井 金五
学生担当部長　三浦 克之
学術情報総合センター所長　橋本 秀樹
医学部附属病院長　原 充弘【再選】
※改選なし

◆平成21年度戦略的創造研究推進事業「さきがけ」に本学から2件採択

「さきがけ」研究は、科学技術振興機構が未来のイノベーションの芽を育む個人型研究を推進するために実施する事業です。本年度は、13の研究領域に対して1,680件の応募があり、163件が採択されました。

本学からは経営学研究科の高田輝子准教授（研究課題：金融市場における相転移の時空間構造の自動抽出と予測）、理学研究科の八ツ橋知幸准教授（研究課題：高強度レーザーによる超多価イオン生成と新規化学反応の開拓）の研究課題が採択されました。

◆平成21年度大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラムに経済学部が採択

文部科学省が各大学等における学士力の確保や教育力向上のための取組を支援するために実施する右記事業に経済学部のプログラム「4年一貫の演習と論文指導が育む学士力」が採択されました。

◆平成21年度組織的な若手研究者等海外派遣プログラムに本学から2件採択

日本学術振興会が日本の将来を担う優秀な若手研究者等を海外に派遣するプログラムに、本学から文学研究科（国際発信力育成インターナショナルスクール若手研究者等海外派遣プログラム）と理学研究科（数学研究所がリードする数学・数理科学の国際的若手研究者の育成）が採択されました。本年度は76機関から184件の申請があり、採択されたのは39機関96件でした。

◆「旧三商大」3大学間で教育交流に関する協定を締結

一橋大学、神戸大学及び大阪市立大学は、平成22年2月1日に、三大学間の交流をより一層発展させ、三大学の教育、さらには学術上の連携・協力を推進していくことについて合意しました。

◆毎日新聞大阪本社から資料の寄贈を受けました

学術情報総合センターは毎日新聞大阪本社から、左記の資料の寄贈を受けました。これらの資料の利用、公開についてはセンターのホームページでお知らせします。

・「毎日新聞」大阪版（「大阪毎日新聞」）明治23年～昭和33年
・「サンデー毎日」大正11年（創刊号）～昭和36年
・「ホームライフ」昭和10年～13年　など

◆南部陽一郎名誉教授が来学

2008年ノーベル物理学賞受賞者である南部陽一郎名誉教授が、本学を訪問されました。理学研究科大学院生との懇談ののち、理学部棟と学術情報総合センターを見学いただきました。本学理工学部で教授を務められていた頃とのキャンパスの違いに驚いておられました。

The Office of Dean

法学部「リーガルマインド」と「市民感覚」

法学研究科長・法学部長　安竹　貴彦

法学部は一九四九年の新制大阪市立大学の創立と同時に法文学部として発足し、五三年に分離して法学部となりました。法学部としては今年で五七年目を迎えます。私事で恐縮ですが、本学に入学したのが一九八二年のことですから、もう三〇年弱を市大法学部で過ごした計算になります。勿論、入学時にはこのような境遇になろうとは夢想だにしていませんでした。改めて振り返ると感慨深いものがあります。

リーガルマインド

さて、本学部は「豊かな発信力と法的思考力（リーガルマインド）を持つ人材養成のための充実した教育・研究」を理念として掲げています。この「リーガルマインド」の定義はかなり難しく、「論理的思考」はもちろんのこと、それ以外にも「批判的精神」「権利・義務・責任に対する鋭敏かつ理性的な対応」「公平性・公正性への配慮」「自分および他者の尊重」等々、多様な内容を含んでいますし、「（これらを実現する一手段としての）『法とは何か』を考え続けること」もこれに含めてよいでしょう。昨年から始まった裁判員制度の導入目的の一つに、「市民感覚・常識の裁判への反映」が挙げられていますが、こうしてみると「リーガルマインド」と「市民感覚や常識」とは、決して相反するものではないと思われます。

新たな学部教育

このようなリーガルマインドは、かつては各種講義や演習を通じ、学生が自力で涵養するものと考えられ、「少人数教育」と「自主性の尊重」を今も特徴とする本学部では、とりわけその傾向が強かったといえます。もちろん意欲ある学生は、伝統ある無料法律相談所（今年で五九年目！）に所属し、市民からの法律相談などを通じて自らを研鑽してきました。しかし、近年ではこれらに加え、学部全体を通じた新たな仕組みを幾つか設けることで、学生諸君のリーガルマインド涵養を側面から支援しています。

たとえば入学直後に提供される少人数の基礎演習では、様々な社会問題を教員と共に多様な視点から批判的に分析し、報告やディベートを通じて、それを発信する能力を養います。また、今年度から将来設計（キャリアデザイン）を見据えた新たな三コース制（法曹志望者などが法律基本科目を中心に学ぶ「司法コース」・公務員志望者などが法律科目のみならず、政策立案能力を育成するために政治・行政学を学ぶ「行政コース」・国際化時代の企業人やマスコミ志望者などが、政治学や国際関係法など幅広い社会科学的知識を習得する「企業・国際コース」）が発足し、主に二回生から各コースに適したメニューが提示されます。更に三回生後期からは、大学院法学政治学専攻の講義の幾つかに参加が可能となり、学問の楽しさや厳しさ、奥深さの一端を体験できるようになりました。この他にも教員による学習相談や、ゼミ幹事会を通じた「三商大（市大・神戸大・一橋大の旧三商大）ゼミ」への参加、懸賞論文への応募など、いずれも学生の自主性を重んじた様々な試みが始まっています。

二つの大学院

大多数の法学部生は、企業や公務員など、様々な分野へ活躍の場を求めて旅立っていきます。学部時代に身につけた「リーガルマインド」は、当初は即効性はおろか、我が物とした実感さえないこともあるでしょう。「この慌ただしく不景気な時代に何を悠長な」と非難されるかもしれませんが、しかしこんな時代であればこそ、必ず役立つ日がやってくるはずです。また、「リーガルマインド」をもっと深く追求しようとする人には、二つの大学院が用意されています。一つは研究者養成を主目的とする法学政治学専攻、もう一つは法曹実務家—本学の場合、とりわけ「市民のための法律家」—の養成を主目的として二〇〇四年に発足した法科大学院（いわゆるロースクール）です。マスコミ報道などを通じ、既にご存知かと思いますが、いずれの道も現在では険しさを増し、将来を約束されたものでは決してありません。しかし、両専攻の院生諸君とも、やはり少人数の利点を最大限に活用し、厳しくも温かな雰囲気のなか、自律的に日々研鑽を重ねています。法学・政治学や司法界を担う「リーガルマインド」溢れる人材を絶え間なく輩出し続ける事も、われわれの責務であると痛切に感じています。

本学部の伝統

かつて駆出しの教員だった頃、法学部案内の作成を担当した私は、本学部の伝統として「自由な雰囲気を持つ教員集団、バイタリティーに富む学生、人間味あふれる事務室」と書きました。これは当時の私の率直な実感でした。あれから随分時間は経ちましたが、このフレーズだけは、今もパンフレットに掲載されています。この伝統は現在もしっかりと息づいていますし、大げさではなく本学部の生命線でもあり、堅持していかねばならないものでもあります。この一翼を担ってくださる方々の入学を心から期待してやみません。

── 卒業生から ──

松本　雅史
シャープ株式会社
副社長執行役員 AVシステム事業統轄
工学部　昭和46年 卒

私は、工学部で流体力学（内燃機関の効率燃焼システムの解析）を学び、モノ作りに目覚めました。そして、1971年にシャープに入社。以来、ファクシミリや携帯電話等の研究・開発やモノ作りに従事するなかで、常に３つのことを意識してきました。

（１）チャレンジ精神

チャレンジ精神とは、目標を達成する意欲と新しい事に挑戦する姿勢です。未来は過去の延長線上とは限りません。逆境にも勇気を持って果敢に挑戦してください。努力は必ず報われます。

（２）半歩先で物事を考える

事業では、「１歩先」だとインフラなどの環境整備が整わず、うまくいかないこともあります。競合他社の「半歩先」に手を打つことが肝要です。

（３）相手の立場で考える

一人でできることは限られます。相手の立場に立って意見をよく聞くことで、さまざまな情報が入ってくるようになります。そして、よく考えることに努め、社内外に支援者を作ってください。

最後に、皆さんが、同窓の人脈を大切に、夢をもって社会に飛躍することを期待しています。

都市で学び　夢をつかむ

大阪市立大学
OSAKA CITY UNIVERSITY

■杉本キャンパス（商.経.法.文.理.工.生活科 各学部・大学院各研究科、本部）
〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138

■阿倍野キャンパス（医学部・大学院医学研究科・大学院看護学研究科、医学部附属病院）
〒545-8585 大阪市阿倍野区旭町1-4-3

■梅田サテライト（大学院創造都市研究科、文化交流センター）
〒530-0001 大阪市北区梅田1-2-2-600　大阪駅前第2ビル6階

●大阪市立大学ホームページ　http://www.osaka-cu.ac.jp

2010年4月

ご意見・ご感想募集

■プレゼント
はがきに（1）氏名（2）住所（3）電話番号（4）年齢（5）職業（6）一番おもしろかったコーナー（7）今後どのような記事が読みたいかを明記のうえ、9月末日までに下記までお送りください。抽選で毎号5名様に市大グッズをプレゼントします。

<宛先>
〒558-8585　大阪市住吉区杉本3-3-138
大阪市立大学法人運営本部総務課　広報担当宛

■発行
公立大学法人　大阪市立大学
法人運営本部　総務課
〒558-8585
大阪市住吉区杉本3-3-138
TEL 06-6605-2011
FAX 06-6692-1295
MAIL koho2007@osaka-cu.ac.jp